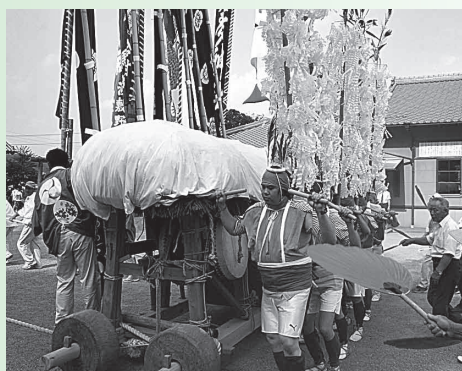


陽夫多神社祇園祭の願之山行事

伊賀市馬場に所在する陽夫多神社では毎年8月1日に祇園祭があり、花揚げと願之山の行事が行われます。

花揚げは氏子8地区から奉納された花笠やうちわを氏子たちが奪い合い、家に持ち帰って厄除けのしるしとします。花揚げというのは本来伝染病をもたらす疫神を花笠に依らせ、花笠を壊すことで、疫神が復活しないよう願う行事です。

花揚げが終わると、拝殿の前で小太鼓をたたく役の幼児と小太鼓を持つ役の幼児の6組12人が囃上げ（今は主催者と呼んでいます）の音頭にあわせて、踊ります。これを小踊りといいます。小踊りの踊り子は山鳥などの羽根を立てた被り物をつけ、背には1mのオチズイを背負っています。



▲願之山

願之山は4個の地車をはめた木組の曳山です。屋根は杉の葉で葺き、大太鼓3張を載せて、6本の旗が立てられています。願之山を30人ほどの曳き手が引つ張るときに、囃上げの音頭に合わせて、3mもある長いオチズイを背負った大踊の青年6人が太鼓を打って、膝をくの字に曲げて踊ります。

願之山が3回拝殿前を往復した後に、願之山を拝殿前に止めて七遍返しを行います。これは大踊りの周りを小踊りの一団が左まわりに七回まわるといふもので、このことで願之山行事が終わります。

大踊りの踊りは本来「願解」の踊りで、かつては掛けられた願の数だけ踊ったそうです。そのため囃上げは神の数を1枚ずつ取って囃歌を歌いました。囃歌は「さんよーりさんよーりげにもさーい」から始まります。すなわち「実にもさあり、様がりもそうよの」(そうだそうだ)という意味の囃子ことばです。これは、中世に流行した踊り歌に広くみられ、現代の狂言の中にもそのまま伝えられているそうです。

願之山の由来については、古い文書がないため、不明なことが多いのですが、安政4年(一八五七年)の『願之山文書』には「文禄年中(一五九二〜九六)より相始り」としています。

かつて人々は思うようにならない疫神を囃し、歌や踊りで花笠や山に取りつかせて追い払おうとしました。願之山行事は山鉾祭りの原始的な姿を伝える貴重なものとして平成21年3月に県指定文化財に指定されました。

教育委員会生涯学習課 ☎ 22・9681

ゆめテクノ伊賀 開所!

明実験室や低温実験室があり、2階にはインキュベーション室が5室あって、入居者は既に決定しています。また3階には、竣工式が行われたテクノホールや研究室が3室あります。



「ゆめテクノ伊賀」は「環境・食・文化」に関する新しい産業の育成を図ると共に、地域の企業と三重大学が共同研究するための「研究拠点」としての機能や、事業を起こす方を支援する「インキュベーション機能」また、研究テーマ別の検討会など学習・情報提供機能・技術交流機能などによる「人材育成機能」と3つの機能があります。

また「人材育成機能」では、セミナーや研修会を広く一般市民や高校生などに開放することによって、人材育成、知識の活用・融合につながることを目的としています。

施設は3階建てで1階には、研究開発関係として研究室4室や照



市の花
ササユリ



市の木
アカマツ



市の鳥
キジ